

## 実践（研究）報告書

広島県立高陽高等学校  
教諭・景山 文恵

### 本実践（研究）のポイント（高校教育指導課指導主事 山田 和大）

本実践研究は、今日的な課題である観点別学習状況の評価と、ICTの活用を中心に行われています。観点別学習状況の評価については、講演を踏まえ、実際の生徒作品を対象にして学校を超えた教員同士が評価をするワークショップを行っており、書道の専門性を踏まえた評価基準に係る協議の在り方が示されています。また、ICTの活用については、研究授業を通して、特に鑑賞に係る活用の仕方について、多様な活用法が提示されています。

#### 1 はじめに

現在、学習指導要領において、ICTの活用は教育効果が期待できる指導方法として取り上げられており、ICTを有効に適切に活用することが求められている。コロナ禍において、授業のオンライン配信はもちろん、資料の配信や課題の提出においても通常化してきたが、生徒の理解が深化するよう授業者の工夫も不可欠となった。また、今年度より1学年では、観点別学習状況の評価が導入され、学校ごとに定めた評価比率に沿って見通しを持った指導が必要となった。書道部会においては、研究授業や実践をリアルタイムで見る機会を設定し、その具体的な方法と実践について部会員での情報共有を図りながら、生徒の学習改善、教師の指導改善につながる評価のあり方を深めていきたい。

#### 2 問題の所在

「書道」の内容の「A表現」と「B鑑賞」の指導については、相互の関連を図るものとされているが、どのような割合でどのように扱うか、またどのように評価するか、という点については常に悩むところである。ICTの活用についてどのような場面でどのように取り入れるか、各校の実践を共有することで効果的な指導方法や評価のあり方を探っていけるのではないかと感じた。

#### 3 具体的な取組

今年度も、「見方・考え方」に焦点を当て、「書に関する見方・考え方を働かせた学習活動に取り組む」ということを目標に、新学習指導要領の趣旨を踏まえた研究を進めた。評価指標としては「感性を働かせる学習活動の工夫に取り組む」、「書を構成する要素やその働きの視点を捉える学習活動の工夫に取り組む」、「書の表現や意味を見出だす学習活動の工夫に取り組む」という3点を設定し、見方・考え方において、部会員それぞれが工夫した内容を考え、授業に取り入れた。新型コロナウイルスの影響で、計画通りの授業展開が行えなかったという回答もあったが、今までを教訓に、会員それぞれが工夫した取り組みが実施された。「見方・考え方」の捉え方はさまざまであると感じるが、各校それぞれに実態に応じた工夫がされている。

また、7月の夏季研究研修会と10月の秋季大会が実施できたことにより、意見交換の場を設定し、共有する場を持つことができた。7月の夏季研究研修会では、山田和大指導主事より、「新学習指導要領下における指導上の留意点と観点別評価について」というテーマに沿って講演をしていただき、より具体的に理解することができた。さらに、研究部より3観点における評価資料を示し、各校の現状と評価割合について意見交換した。「雁塔聖教序（無形）」・「願氏家廟碑（守道）」の生徒作品から、実際の作品に対する評価規準にも触れることができた。10

月には実際の研究授業を参観する形での秋季研究大会が3年ぶりに実現し、「仮名の書」の導入の授業観察を通して、本物を見ることの大切さやタブレットを活用した鑑賞の授業を共有することができた。具体的には、ワークシートをスクリーンに投影し、タッチペンで回答を生徒と一緒に記入していくことで、生徒と同じ目線での解説がされていた。板書では背を向けてしまいがちだが、ICTを活用することで生徒と向き合い、理解度を確認しながら解説ができるという利点もあるように感じた。また、グループごとに仮名の価値をJamboardにまとめる際は、①文字・線について②全体構成について③用具用材について④その他に分けることで、鑑賞する視点が定まった。生徒は一人一台iPadを所持しており、Jamboard上にその場で撮影した写真を貼りつけ、その隣に付箋機能を用いて自らの気づきを書き込んでいた。日頃から、Jamboardの使用に慣れていることに加え、本授業での生徒は古谷先生のホームルームクラスの生徒でもあり、教室掲示等を通して意図的に日頃から書に触れる機会を設けていることもあってか、時間いっぱい意欲的に鑑賞に取り組んでいたのが印象的であった。筆に実際に触れ分析をする生徒や、変体仮名の読み方を書道部会の教員に尋ねる生徒、線のキレに注目する生徒等、興味・関心の高さを感じられた。

新学習指導要領になり、実施年度を見据えて作成した単元テンプレート・指導計画を集約し、共に研鑽していけるよう呼びかけている。

#### 4 成果と課題

書道部会の開催については、今後の状況を考えながら工夫が必要と思われるが、時間の短縮や規模の縮小となっても継続していくことが大切と実感できた。オンラインやビデオではない授業研究や、講演を聞くことはとても有意義な研修となった。教科の特性もあるので、部会員の情報共有できる場を増やしていきたい。「本物に触れる」ことの大切さを再認識することができた秋季研究大会では、ICT機器の活用法だけでなく、デジタルで良いものに触れる機会を増やすことができることを実感した。

今後の課題として、本質的な問いの設定について協議していきたい。そのためには、指導者が何を目指し、生徒にどんな力を身に付けさせたいかを明確にする必要がある。技術的な面に加え、「書を通して心豊かな生活や社会を創造していく態度を養う」の目標に対して、各校での実践を通して研鑽を積みたい。

#### 5 おわりに

今年度は、研究目標設定から3年目となり、部会員の協力と日々の授業実践に向けての努力もあり、目標値を達成することができた。次年度以降、今後、どのような研究目標を設定し、会員に周知していくかを考えていかなければならない。会員の取組を検証できるような研修を、集まって実施するということが制限されるコロナ禍で進めていくには苦難があるが、会員ひとり一人が、常に研究目標を意識した取り組みを継続していくための「自主的な研修」を取り入れていきたい。